

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 方言の旅 解説書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/2877">https://repository.ninjal.ac.jp/records/2877</a>

国立国語研究所「ことばビデオ」シリーズ  
〈豊かな言語生活をめざして〉3 解説書

## 方言の旅

国立国語研究所



## はじめに

国立国語研究所では、平成 13 年度から、「ことば」ビデオシリーズ＜豊かな言語生活をめざして＞を制作しています。これは、文化庁が昭和 55 年度から制作してきたビデオテープ・シリーズ「美しく豊かな言葉をめざして」を引き継ぐものです。今後、このシリーズでは、国立国語研究所で行っている日本語や言語生活に関する調査研究の成果を生かしながら、音声や映像といった視聴覚素材の特徴を利用して、言葉に関する問題の提示や解説を行い、言葉をめぐる様々な事柄について考えたり話し合ったりするきっかけを提供していきたいと考えています。

平成 15 年度は、「方言の旅」という題で、現実に使われている話し言葉としての方言の様々な側面や、方言について調べたり考えたりする方法を具体的に描いています。この解説書は、ビデオを一層効果的に利用していただくため、制作意図を明らかにし、利用の際の留意点などについて述べたものです。

このビデオ・シリーズが、国語科や「総合的な学習の時間」などの教材として、あるいは大学等の授業や各種生涯学習の場などにおいて広く利用されることを期待いたします。

平成 16 年 3 月

独立行政法人 国立国語研究所長  
甲斐睦朗





## 目次

＜このビデオの目的＞ .....	1
＜内容＞ .....	2
＜ユニットごとのねらい＞ .....	2
＜シナリオ＞ .....	6
＜話し合いのために＞ .....	46
＜制作体制＞ .....	48



## <このビデオの目的>

方言は、最も身近な話し言葉です。そして、それは、地域によって異なります。

そのような身近に存在する方言とはどのような言葉でしょうか。また方言をどのようにとらえ、考えればよいのでしょうか。このビデオは、方言が実際に使われている様子や様々な資料を示し、それらと重ね合わせながら、作品を御覧になる皆さん自身が考えるための材料としてもらうことを目的としています。

方言は、それぞれの地域でお互いに伝え合う話し言葉です。ですから、「崩れた言葉」とか「間違った言葉」では、決してありません。それぞれの地域の方言にはそれぞれの方言の「きまりごと」、つまり文法が存在しています。

それでは、どのようにして方言としての地域ごとの違いが生まれてきたのでしょうか。これについては、方言学という学問分野で研究が進められてきました。

方言も時代とともに移り変わります。また、全国的に共通語が普及している現代にあつては、場面による方言と共通語の使い分けも行われています。

このビデオは、以上のようなことが具体的にとらえられるように構成されています。

なお、本作品に出てくる方言の会話は、かなり自然に近いものです。適宜選択すれば、山形県三川町の方言資料としても利用できるでしょう。

またこの作品は、私たち国立国語研究所が編集した『新「ことば」シリーズ 16「ことばの地域差—方言は今—」』（国立印刷局刊行）の内容とつながりを持たせています。以下の「ユニットごとのねらい」では、「⇒新「ことば」シリーズ 16」として関連箇所を示していますので、参考にしてください。

本ビデオは、平成 13 年度に作成した「相手を理解する 一言の背景を見つめると……」で扱ったテーマの中から、「方言」を取り上げたものです。平成 13 年度の作品では、＜「すみません」の意味・機能＞＜方言＞＜丁寧な言葉＞＜「ほめる」という言語行動＞＜あいまいな表現＞という 5 つのテーマを扱いました。平成 14 年度から 3 年間にわたり、それぞれのテーマを掘り下げる作品を計画し、平成 14 年度の＜丁寧な言葉＞＜「ほめる」という言語行動＞に続き、平成 15 年度は＜方言＞に焦点を当てました。

## ＜内容＞

方言をテーマにレポートを書くことにした東京の大学生、  
たちばな よしこ 橘 美子は、教授の紹介で、山形県の日本海側、庄内地方に位置する三川町の佐藤武夫たけおさんに出会い、現地を訪れます。地元の人たちとの交流を通して、生きた方言に触れ、方言に存在する文法・方言の変化・方言と共通語の使い分けなどの実際を経験します。東京に戻った美子は、三川町での経験を生かしながら、言語地図などの資料を参考に考察を深め、再び現地に赴くことで、レポートを完成させます。

## ＜ユニットごとのねらい＞

### 第 1 話 方言と出会う

方言を対象にしたレポートを書くことにした東京の大学生、橘美子は、山形県三川町の佐藤武夫さんに誘われて現地に向かいました。三川町の最寄り駅、鶴岡駅に到着した美子は、バス停を教えてくれた年配の方の方言が理解できず、戸惑ってしまいます。バス停で話し掛けた高校生たちは、美子には共通語で答えますが、自分たちは、方言でおしゃべりをしています。ここでは実際の方言の会話を通して、方言とはどのようなものかをまずは示すことをねらっています。また、方

言と共通語の使い分けの実際を提示することもねらいの一つです。

⇒新「ことば」シリーズ 16

28 ページ 解説1 ことばの地域差—方言は今—

38 ページ 解説2 ことばの地域差の多様な姿

80 ページ 問1 「方言」というのはどのようなことばのことですか。

88 ページ 問5 方言によって「素朴」「おだやか」「荒っぴり」など、それぞれのイメージがあるような気がします。どうなのでしょう。

三川町に到着した美子は、地元の方に道を聞きながら、佐藤武夫さんを訪ねます。そして、佐藤さんが、地元の中学校で「方言」を課題にした授業を行っていることを知り、翌日の授業に参加させてもらいます。ここでは、方言とはどのようなものかを再度示すとともに、美子が三川町の方言への理解を深める次の場面へのつながりを考慮しています。また、三川町において実際に行われている方言の聞き取りや書き取りといった授業風景は、積極的に児童生徒を地域の言葉に取り組ませる実践的な教育活動であり、参考になるでしょう。

⇒新「ことば」シリーズ 16

9 ページ 座談会

60 ページ 解説4 地域のことばと「ことば教育」

90 ページ 問6 よその地域の方言を話すには、どうすればいいですか。

98 ページ 問10 共通語を話していて時々「言いたいことがうまく言えない」と思うことがあります。方言だとぴったりくる言い方があるのですが。

100 ページ 問11 方言には共通語と違う発音がいろいろあるようです。どのような発音の違いがありますか。

102 ページ 問12 アクセントのない方言があると聞きました。そういう方言では、すべての単語を平らに発音するのですか。話し手の意図が伝わりにくありませんか。

112 ページ 問17 方言と共通語は、学校の中でどのように話されていますか。

中学校の放課後、仲良くなった中学生たちとともに道を歩いていると、中学生の祖父母が通り掛かります。祖父母どうしや祖父母と中学生の会話を耳にして微妙な使い分けに気がきます。同時に三川町の方言に頻繁に現れる助詞「サ」の使い方について、中学生に質問を投げ掛けます。宿に戻った美子は、「サ」の使い方を整理する中で、方言には共通語とは違う文法が存在することに気がきます。そしてこのことを確かめるために佐藤さんのお宅を訪ねます。ここでは、方言の中に存在する文法、同一方言社会の中での世代差、また方言の中でも使い分けがあることを具体的に提示することをねらいとしています。

#### ⇒新「ことば」シリーズ 16

38 ページ 解説2 ことばの地域差の多様な姿

48 ページ 解説3 変わりゆく地域のことば

92 ページ 問7 私の住んでいる地域では、小学校の通学範囲のことを「校区」と言います。しかし辞書を見ると、共通語では「学区」と言うようです。町内の人に配るお知らせには、「校区」ではなくて「学区」と書くべきでしょうか。

94 ページ 問8 東北のある地方で、女の人が自分のことを「オレ」と言っているのを聞きましたが、方言には男女差がないのでしょうか。

96 ページ 問9 方言はだんだん使われなくなっているように思います。将来は完全になくなってしまうのでしょうか。

104 ページ 問13 東北では「山に行く」を「山サ行く」と言うと言ったので、「いい天気になった」も「いい天気サなった」だと思ったら、この場合は「ニ」だと言われたのですが。

## 第2話 方言を考える

東京に戻った美子は、大学の図書館で参考資料を調べることにしました。方言辞典、方言地図、また方言の会話を収録した談話資料など、方言に関する多くの資料が存在します。また、三川町で美子が関心を持った助詞「サ」の分布が見ら

れる全国的な地図もあります。ここでは、代表的な資料を紹介します。

⇒新「ことば」シリーズ 16

70 ページ 解説 5 方言を調べる

このような資料に見られる分布から多くのことを読み取ることができます。ここでは、「圏分布」や「東西対立」など、基本的な分布の説明方法を視覚的に紹介することをねらいにしています。

⇒新「ことば」シリーズ 16

84 ページ 問 3 日本語には方言がいくつありますか。

108 ページ 問 15 言葉に地域差があるということは、いつごろから意識されていたのでしょうか。

110 ページ 問 16 方言には古い言葉が残っていると聞きました。たとえばどんな言葉があるのでしょうか。

美子は、様々な資料を通して考える中で、再度現地に行って調べてみなければ分からない課題が残されていることに気付きます。三川町を再訪し、現地の人々との交流を重ねながら、レポートを完成させていきます。

主人公、美子は、生きて使われている「方言」を通して、問題を発見し、科学的に解決していく方法を探っていました。

どんな場合にでも言えることですが、疑問に思ったこと、明らかにしようと思ったことにすぐ答えが出るとは、限りません。美子がたどったような曲がり道は付き物です。しかし、その先には、面白い、わくわくするような発見がきっとあるはずです。そんな未知の事柄に、身近な言葉である「方言」を通して、近づいてみようという気持ちを抱いてもらえれば幸いです。



## <シナリオ>

※自然会話の文字化について

- ・自然会話はできるだけ忠実に文字化していますが、完全ではありません。また、分かりやすさを優先して、方言の発音を共通語的に表記しています。御注意下さい。
- ・理解しづらいと判断された方言の部分には下線を付けて、[ ] の中に共通語訳を補いました。

例 酒田方面だはけ [だから]

- ・理解のために補った部分は< >の中に示しています。

例 まず、<家に>入ればいいね

## 方言の旅

### 第1話 方言と出会う

#### 1-1 特急列車の車内

期待に胸躍らせる橘美子（大学三年生）がいる。車窓の風景に見入る。

#### 1-2 大学(回想)

キャンパス外景。

中庭でくつろぐ学生たち。

---

研究室の廊下を来る美子。

ドアをノックする。

教授 「はい、どうぞ」

美子 「(ドアを開けながら) 失礼します。橘です」

研究室には佐藤亮一教授と客がいる。

教授 「ああ、どうぞ」

美子、ドアを閉める。

教授 「あつ、ちょうどよかった。こちらは山形県から来られた  
佐藤武夫さんです」

武夫 「はじめまして。佐藤武夫です」

美子 「(会釈して) 橘美子です」

教授 「佐藤さんは、東北弁、庄内弁を大事にする会の会長さん  
です。山形県三川町の全国方言大会を最初に企画された方です」

美子 「そうなんですか! (興味津々の表情)」

教授 「橘さんは、わたしのゼミの三年生で、今度、方言をテーマにしてレポートを書こうとしているんです」

武夫 「ああ、そうですか」

美子 「はい。わたし、先生の授業を聞いていて、東北地方の方言に興味があるんです。でも、まだ行くチャンスがなくて…」

武夫 「ああ、そうですか。わたしたちの三川町でよろしければ、  
どうぞ。生きた方言に触れることができますよ」

教授、ほほ笑みながらうなづく。

美子 「本当ですか!」

武夫 「はい。歓迎しますよ!」

美子 「(心、動かされ) 三川町は、先ほどおっしゃっていた庄  
内弁なんですか?」

武夫 「そうです。(ドアにはってある日本地図に近寄って) 山  
形県の庄内地方はここです。この庄内のほぼ中央にわたしの暮ら  
している三川町があります。米どころでしてね。今でしたら稲穂  
がお辞儀してますよ」

笑顔でうなづく美子、地図に目を移す。

山形県の庄内地方にズームアップ。

### 1-3 特急列車の車内

特急の車内の美子にズームアップ。

車内アナウンスが鶴岡駅が近づいていることを告げる。

車窓に流れる庄内平野の広がり。

稲穂の波の中を走る特急。その画面に、山形県の地図が重なる。

地図には、酒田市と鶴岡市に挟まれた三川町の位置が示されている。三川町は美子の目的地である。

#### 1-4 JR 鶴岡駅前

駅前広場。流れる庄内の民謡。

字幕 《鶴岡駅》

荷物を抱えて駅舎から出てくる美子、バス停を探す。

美子、バス路線案内図を見るがよく分からない。

通り掛かった地元のお年寄り（70 歳代の男性）に尋ねる。

美子 「あー、あの、すみません。あー、あの、三川町行きのバス停は、どこでしょうか」

お年寄り「三川町…、酒田方面だけは [だから]、5 番だっちゃ [5 番だよ]。あっちゃ [あっちへ] 行ってやー、聞いてみた方がいいなんねーか [いいのではないか] ………。バス停さ行ってな」

美子 「(よく理解できないで) …あの一、三川町へ行きたいんですが」

お年寄り「バス停、酒田行きさ [酒田行きに] 乗って行けば、三川さ [三川に] とまるかんじょうだ [止まることになっている]。

そこへ行って、また、あこへ行って、聞いてみれ [聞いて見ろ]！」

美子 「(まだ分からず) あ、ありがとうございました」

お年寄り「気い付けての一」

美子 「はい」

会釈してバス停を探す。

---

五番の酒田行きバス停。

二人の女子高校生が立ち話をしている。

美子、近づく。

美子 「(二人に) あの、すみません。三川町行きのバスは、こ

こでしょうか？」

高校生A「はい。三川町に行くには、酒田行きのバスに乗れば行きますよ」

美子「あの一、押切<sup>おしきり</sup>というところ、通ります？」

高校生A「(高校生Bに) えっ、通ったっけ？」

高校生B「(美子に) 通りますよ」

バス停に表示された路線図のところに美子を促し、

高校生B「(押切を指さして) 乗ってから 20 分ぐらい掛かります」

美子「どうもありがとう」

高校生A「いいえ」

バスの到着を待っている間に、女子高校生たちは、再び、おしゃべりを始める。

字幕《二人の話題「家族で食事に行ったときのこと」》

高校生A「なあ、このめーやー [この前ね]、あれ、あっこの [あそこの] 何だっけなー、あ、クレープ食いさ [食べるに] 行ったなやの [行ったんだよね]。での [それでね] みんな、家族みんなで行って…」

高校生B「家族みんなで行ったの？」

高校生A「行ったの」

高校生B「あー、なんか食ってそうだの [食べたそうだね]。いっばいの [たくさんね]」

高校生A「での、で、なんか、妹は、なんかやー、一緒に家族で行くなが [行くのが] やんだっとか [嫌だとか] 言うなや [言うんだよ]。なんか、おっとーがや [お父さんがね]、あれだろ。(美子、二人に視線を移す) おっとーと一緒にいんなが [いるのが] やんだはげ [嫌だから] だろ。で、行って、それで行ったなやの [行ったんだよね]。で、結局、妹が車さ [車に] 乗ってて、わたし、まんず、みんな行って、三人」

高校生B「食えなかったの？」

高校生A「んーん。だはげの [だからね]。妹は、何って聞いてて、  
で、妹はアイスで、おっかー [お母さん] もアイスで、でや、『何  
食いてー?』って、お父さんに聞いたなやの [聞いたんだよね]。  
そしたらや、お父さん、『クレープがいい』なんてや…、(字幕《父  
親がクレープを食べた》) 顔に似合わずや、おやじのくせして、  
クレープかやー [クレープかよー]、なんて思ってたんけどや…」  
美子、聞くとはなしに聞こえてくる会話に耳を傾けながら、漠然と「こ  
れが方言か」と理解する。

#### 1-5 三川町 押切のバス停。

近づいてくるバス。

バス停に止まる。

降り立つ美子、バスが走り去る。

辺りを見回し、メモを見る美子。

メモには、佐藤武夫家の住所と略図が書いてある。

#### 1-6 三川町の風景

稲刈りを待ち、お辞儀をしている稲穂。

広々とした田んぼの奥には鳥海山。  
ちょうかいさん

字幕《鳥海山》

そして月山の山並み。  
がつさん

字幕《月山》

美子が農道を通り過ぎる。  
ひがしたがわぐんみかわまち

字幕《山形県東田川郡三川町》

#### 1-7 土口（どぐち）の標識

標識の下に来る美子。

標識に記されている地域名「土口」のアップ。

## 1-8 小さな稲荷神社の脇

赤い鳥居のそばでは、農家の女性が草取りをしている。

美子、女性に近づき、声を掛ける。

美子 「あの、すいません！土口の佐藤武夫さんのお宅はどちら  
でしょうか？」

女性 「ああ、武夫さんえ〔武夫さんの家〕かー、まてよー」

美子のそばに来て、

女性 「そこの十字路とこ、左さ行くな」

美子 「はあ？」

女性 「あのの。そこの十字路とこ、左さ曲がんな」

美子、戸惑う。その表情に、

美子（モノローグ）「曲がるなって言ってるのかなあ…」

美子、女性に尋ねる。

美子 「左ですね？」

女性 「はい、そうです」

美子 「あ、はい。分かりました。ありがとうございました」

一礼して先を急ぐ。

見送る女性。

十字路。美子、迷いながら右へ曲がろうとすると、

女性 「（大声で、身振りを交えながら）右さ曲がんな！左さ曲  
がんな！左さ曲がんな！」

美子、戸惑うが女性が左方向を身振りで示すので、左へ曲がって行く。

## 1-9 佐藤武夫家 表～庭

美子、確認して門を入って行く。

庭で、外出しようとしている武夫氏と出会う。

美子 「あ、どうもこんにちは！」

武夫 「おお、こんにちは、よく。しばらくでした、どうも」

美子 「はい、ごぶさたしてます」

武夫 「(玄関から出て来る奥さんに) …おっ、ねー、ちょっと、  
東京から来た橘さん」

美子を紹介する。

美子 「(会釈して) 橘美子です」

奥さん 「(笑顔で迎えて) どうもどうも、はじめまして。よく来ました」

武夫 「あの、佐藤先生の、ほら、ゼミ生で、方言調査、来たの」

奥さん 「めごいのー [かわいいねえ]」

美子 「(バッグから取り出し) これ、東京のお土産です」

奥さん 「(恐縮して) あっ、すみません。もっけでございます [ありがとうございます]

武夫 「そんなもの…、わざわざ、もっけだの [ありがとう]」

奥さん 「(家を指して) まず、<家に>入ればいいね」

武夫 「あっ、おれの、今の、行かぬまねくて [行かなければならなくて] んー、これから行かぬまねくて、時間で行かぬまねくて」

美子 「わたしも、まだ宿に…」

武夫 「宿はどこだけあ」

美子 「<sup>でんでん</sup>田田です」

武夫 「田田の。んだば、おれ、今、田田さ行こうと思ってたから、おれの車さ [自分の車に]、いっしょ乗ってあべ [一緒に乗って行け]」

美子 「はい、ありがとうございます」

奥さん 「まず、いいであや [いいじゃないの]、入ればいいし」

武夫 「おれもな、時間<のことが>あんなや [あるんだよ]」

奥さん 「んだ…。(美子に) へば、どうも何か、また来てくださ  
いの。すみませんのー。もっけでございます [ありがとうございます]  
ます]。どうも」

武夫 「せば、の、乗ってあべ [乗って行け] …」

車の方へ促す。

武夫氏と美子、車に向かう。

## 1-10 三川町の田園風景～田田の宿

武夫氏の車から見た田んぼ。

いろり火の里の駐車場。

字幕《いろり火の里》

駐車場に立つ三川町の案内図。

案内図の下部に表示してある三川町の方言集の文字。

宿泊研修施設・田田の宿の外景。

字幕《田<sup>でんでん</sup>田の宿》

車が到着し、降りる美子と武夫氏。

武夫 「はい、ここが、田田の宿です」

案内され館内へ入って行く美子。

## 1-11 田田の宿・フロント

迎える受付の女性。

受付 「いらっしゃいませ」

武夫 「あ、こんにちは」

受付 「こんにちは」

武夫 「あの、東京から来た橘さん。あの、チェックインで…」

受付 「はい、橘様ですね。…そうしますと、こちら、よろしい  
でしょうか」

チェックインの用紙とペンを渡す。

美子 「はい」

記名する。

## 1-12 田田の宿、方言ライブラリー

展示品について武夫氏が説明している。

字幕《方言ライブラリー》



武夫 「ここなの [ここはね]、あの一、いろいろな方言グッズで…。これあ、方言大会の、これあ、第6回の方言美人大賞…。んで、これは、第1回目からずーっと、方言大会のビデオ…。方言の書いてある手ぬぐいとか… (手ぬぐいのアップ)」

武夫 「(本棚に近づいて) あの一、庄内弁を中心にした本、もっと、あの、方言の本、いっぱいある中で、まあ、あの一、この地元を載せてあるものが大体ここにある」

美子 「いっぱいあるんですね…」

武夫 「ここさあんなはの [あるのはね] 言葉の中でもこの地方の、庄内弁の書いた本が主に多くて…」

武夫氏と待ち合わせしていた五十嵐<sup>いがらし</sup>氏と佐藤氏が入って来て呼び掛ける。

五十嵐 「武夫さん、どうも」

武夫 「あつ、どうもどうも、御苦労さん。どうも、よくよく…。こっちの、あの、東京から、学生で、方言の勉強<sup>べんがく</sup>しさ [勉強しに]、今、来たんでも、橘さんって…」

美子 「どうも、橘美子です。よろしくお願いします」

五十嵐 「御苦労だにゃー」

佐藤 「よく来たの一」

武夫 「こっちはの…、中学校で方言の選択授業、担当してるんだけど、子供たちのお父さんの五十嵐さんと佐藤さん」

美子 「あ、どうも、えっ？方言の授業なさっているんですか？」

武夫 「んだ」

美子 「へー、えっ！わたし興味あります」

武夫 「あー、んだ [ああ、そうなんだ]。そしたら、ちょうどいい。明日、授業あつから、明日1時で中学校の教室に來ればいい」

美子 「(喜んで) あ、本当ですか。はい、行かせていただきます」

武夫 「(うなずき)で、あの、お父さんさ、ちょうど、話あつから、あの、こっちで本でも見てて」

三人、囲炉裏の席に着く。

佐藤 「今日は何だや」

字幕《三人の話題「学校祭で行われる方言寸劇の練習について」》

武夫 「あのの、今、ちょうど授業でやー、学校祭が近づいたもんだはけー [近づいたものだから]、学校祭<の>ときやる、方言寸劇やんなや [やるんだよ]、それ、三班さ [三班に] 分かれてて、それ、子供たちが皆、あの、どういう場面を設定して、だれが、どうやるかっていうのが、今、ちょうど決まり掛かったとこで、それで決まったら、あと、練習さ [練習に] 入んなんどもの [入るのだけれどもね]

佐藤 「おらえな [うちの子は]、できっかなー [できるかなあ]

武夫 「ん。大丈夫だ。最初はみんな、こう悩んだけど、今、大体やる方向が決まれば、皆にこにこと明るくなってや」

五十嵐 「んだか。おらえのやろ [うちのやつは]、学校の話、全然しねえけども、どげなったかやのー [どんなふうになったかなあ]

武夫 「あー、それだって、大丈夫。あの子、うちさ [家に] 行って、話しねーたって [話をしないといても]、子供たち見れば、もう、一生懸命、ぺちやぺちやしやべってて、皆、決めてっから、まず、心配ね……。ところで、稲刈り、どのくれ [どのくらい]、できたや [できたか]

字幕《三人の話題「稲刈りの進み具合について」》

佐藤 「稲刈りだば、とんと進まねー」

武夫 「五十嵐さんは？」

五十嵐 「今年、遅く始めたもんだはけのー [始めたものだからねえ]。なかなか、してや [それでね]、<天気が悪く>たもどやっ

こいなやー [田んぼが柔らかいねえ], <自分の>いなはの一 [家のはね]。あくどまで [かかとまで] やー, ぬかって大難儀してやー」

本を読んでいる美子, 振り返り, 三人の会話に首をかしげる。

武夫 「<稲の>作はどげなもんだや [作柄はどんなものだ] ?」

佐藤 「作はねえぜ」

武夫 「平均でどのくれ行くもんだ？」

佐藤 「まだ, <籾<sup>もみ</sup>を>むかねさげ [むかないから], わかねども [分からないけれども]」

武夫 「<1 反(注記: 1 反=約 992 平方メートル) 当たり>9 俵(注記: 1 俵=約 72 リットル)は行くろや？」

五十嵐 「9 俵は行かぬの」

武夫 「んだか。まず, 困ったにやー」

五十嵐 「米値段, 上がってくるあてす一 [って言う] けどもの, どげなんなもんだか [どんなになるものだから]」

武夫 「米値段, 上がんなは [上がるのは], 余り, 期待できめ一な [期待できないだろうな]」

佐藤 「いや, なんぼかは [幾らかは], 上がんぜ [上がるよ]」

武夫 「なんぼか, 上がんな [上がるなあ]」

佐藤 「上がる, 上がる。上がるどもの [上がるけれどもね], んだ, 今年だけだろんな」

武夫 「今年だけ？」

佐藤 「また, 来年なれば [来年になれば] …。」

美子, 本を読みながら, 聞こえてくる方言に…。

美子 (モノローグ) 「…さっき, 紹介してくれたときは分かったけど, 今, 話してる言葉は, ほとんど分からない!」

## 1-13 三川町の朝

鳥海山や広々とした田畑に陽光が差している。

## 1-14 三川中学校 外景

校庭, 校舎。

字幕《三川町立三川中学校》

## 1-15 三川中学校 教室

武夫氏が教壇に立って, 方言教室が開かれている。

美子は教壇の傍らで, 武夫氏の話を書き取っている。

字幕《選択授業「方言」》

武夫 「海辺なら, 海とか波とか魚とか船とかに関係ある言葉の方言がいっぱいある。それは, 海辺で使う方言は山ではいらないわけ。山奥だと, 木とか山菜とか猿とか熊とかっていうのが出てくるわけ。それは, 海の方ではあんまり, そういう方言は使わなくていいわけ。だから, この地域にぴったり合った言葉がそのいい言葉なの」

武夫氏の話に聞き入る生徒たち。

---

板書しながら話す武夫氏

武夫 「天井さある『<sup>すす</sup>煤』もお祭りで回る『獅子』も, …天井のスス, お祭りで回るスス, 同じ発音。こういうことが, 三川の言葉はそういう意味で発音の中間語。分かった？」

---

黒板には, 「知事, 地図, 父, 土, 乳」と書かれている。それを指して,

武夫 「田んぼと畑のツズ, 牛のツズ, アクセントは違ってもほとんど口をあけねって [開けないで] できる, はい, 県ツズ, はい, 道路ツズ, はい, ツズ親, はい, 田んぼと畑のツズ, 牛のツズ, こういうふうに。みんな, ツズ, ツズ, ツズ, ツズ, ツズ。不思議だろ, こうやって書くと」

笑う生徒たち。

---

方言の聞き取りが始まる。

字幕《方言の聞き取り》

武夫 「皆さんから、方言の聞き取り、はい、聞き取りやります」  
生徒たち、ノートを準備する。

武夫 「おらえのじさま、いんからまんからて、のめくた。(書き込む生徒) もう一回言うからの。おらえのじさま、いんからまんからて、のめくた」  
美子も書いている。

武夫 「二番目、はい、二番目いいかあ?…きんな、いぬがらぼっかけられて、こうえけ。…きんな、いぬがらぼっかけられて、こうえけ」  
ノートに書き込んでいく生徒。

聞き取りを板書する生徒。

武夫 「正しくの。『犬から』とか『犬がら』とか、濁点なんかも聞き逃したら駄目」  
黑板には生徒が書いた文章。

武夫 「いいか。あの一、聞き取りっていうのは、『かきくけこ』だか『がぎぐげご』だかの濁点あつかないか、ちゃんと聞き取らねえと駄目だ」

黑板の文章「おらいのじさま いんからまんからて のみくた」を見て、

武夫 「…おらいのじさま、(おらいの『い』の上に『え』書き加え) …これあ、さっき言ったように、あの一、中間語だから、これを『え』を書く人もいるけども、どっちも間違えてねえから。自分の使ってる多い方書いていい。えーと、『おらいのじさいんからまんからて のみくた』(と、読み上げ) 大体いい。大体、正解。(のみくたの『み』の上に『め』を書き加える) これはあの、『み』でねくて『め』でもいい。めとみの中間。…大川さん、意味分かつか?」

大川 「おじいちゃんが…。(考えて) 飲んだり食ったりした」  
笑う生徒たち。

武夫 「(笑顔で) 飲んだり食ったりした。はい。今、大川さん  
言ったのは『おじいちゃんが飲んだり食ったりした』これは、『お  
らえのじさま』だから『うちのおじいさん』、メモ写しとけよ。  
うちのおじいさん、『いんからまんから』っていうのは、よろよ  
ろして、よろめいて、つん…のめた。よろよろしてつまずいて倒  
れたっていう状態のこと」

メモを取る美子。

黒板の文章「きんな いぬからぼっかげらいで こえけ」を見て、

武夫 「南葉君。(黒板の『いぬから』の『か』に濁点を加える)  
犬からじゃなくて、おれ言ったのは『がら』だから、ちゃんと、  
濁点なるように。…はい、意味言ってみれ」

南葉 「犬から追っ掛けられて怖かった」

武夫 「はい。追っ掛けられ…、追い掛けられて怖かった」

---

学校祭の出し物を考える生徒たちとコミュニケーションを楽しむ美子。

## 1-16 中学校近くの田のあぜ道

美子を囲んで中学生たちが帰って行く。

軽トラックが追って行って、中学生たちの脇に停車する。

運転していたお年寄り(70歳代)が降りて来る。

祖父 「お、裕太郎」

裕太郎 「あつ、じいちゃん」

祖父 「(美子に気付き) これはどうも、新しい先生ですか? あ  
たし、この子のおじいさんですけども、孫がいつもお世話になり  
まして…」

美子 「あつ、あの、わたし、学生なんです」

裕太郎 「東京から来て、方言調べさ来たんけ [来たんだよ]」

祖父 「大変、ご苦労ですの。どうも」

助手席から降りて来る祖母。

祖母 「あ、どうも。遠いところより大変ご苦労様です。わたし、  
あの、裕太朗の祖母です」

美子 「あ、そうですか。どうも」

祖父と祖母の会話。

祖父 「んだば、どうせばいいのー」

祖母 「乗せてやったら」

字幕《美子を車に乗せる相談》

祖父 「トラックさ二人がつと [しか] 乗らえねしの一」

祖母 「荷台のすまっこさでも [隅にでも], 乗せらえねがや [乗  
せられないかな]

祖父 「荷台だば駄目だぜー」

祖母 「めじょけねども [かわいそうだけれども] どうもならね  
の一」

祖父 「んだの一」

聞いている美子に、

女子A 「何て言っているか、分かる？」

美子、首を横に振り困惑顔。

祖父と祖母、孫を乗せて行くのをあきらめた様子で、

祖父 「それじゃ、先さ帰つか」

美子に一礼する。

祖父 「どうもの一」

祖母 「どうもありがとうございました」

美子も答礼する。

裕太朗 「じいちゃん！ 今度の日曜、鶴岡さ行くあんろ [行くのだ  
ろう] ？」

祖父 「うん、行く。お茶の会、あっさけ」

裕太朗 「おれも乗せてってくいる？」

祖父 「うん、いいよ。何かあつかや？」

裕太朗 「サッカーの大会、あんなだー」

祖父 「んだか」

裕太朗 「(隣にいる裕郎を差して) 裕郎も乗せてってくいる？」

祖父 「うん、いいよ。三、四人だば乗せらいるよ」

裕太朗 「じゃー、頼むぞ」

祖父 「うん」

美子、祖父母どうしの会話よりは聞き取れる様子。

祖父母の乗った軽トラックが去って行く。

頭を下げて見送る美子。

軽トラックを見送った後の裕太朗と裕郎の会話。

裕郎 「ほんといそげ [本当にそんなに] 乗れんな？」

裕太朗 「トラックじゃねくて、ワゴン車あつから大丈夫だ」

裕郎 「じゃー、幸平と直人も鶴岡さ乗せてってもらえる？」

裕太朗 「分かった。じゃー、じいちゃんさ頼んどくー」

裕郎 「頼むぞー」

美子、聞いている。

美子 (モノローグ) 「…今のは、中学生どうしでしゃべる方言なんだ」

美子、メモを片手に中学生たちに尋ねる。

美子 「ねえ、ちょっと教えてほしいんだけど、『鶴岡サ』って、  
『～<sup>なにになに</sup>に』とか『～<sup>なにになに</sup>へ』に当たるところを、こっちでは、よく『サ』を使ってるんだけど、『庄内サ帰る』とか『東京サ行く』とかいうの？」

中学生たち、「言うよ」などの肯定の返事。

美子 「じゃあ、『わたしは先生サになりたい』って言う？」

肯定する一同。

美子 「じゃ、『先生に手伝ってもらった』とか『犬に追い掛けられた』って言うのを『先生サ手伝ってもらった』『犬サ追い掛けられた』って言う？」

女子B 「それは『サ』じゃなくて『ガラ』って言うんだよ」

美子、メモを取る。



美子 「ふーん…。ありがとう！じゃあ、帰ろうか！」

美子と中学生たち帰って行く。

## 1-17 三川町の夕景

稲穂。

田畑と夕日。

## 1-18 田田の宿 美子の部屋（夕方）

美子、テープを聞き直し、メモを整理する。

カードにした「サ」を使う用例、「ガラ」を使う用例を並べていく。

その手元がふと止まり、考える美子。

美子（モノログ）「…なぜ、『先生に手伝ってもらった』とか『犬に追い掛けられた』では『サ』を使わないのかなあ？方言っていろんな言い方が混ざっていて混乱しているのかな…。（考え込む）でも…、共通語の『に』が全部『サ』に当たるわけではないって考えたらどうだろう…あっ！（と何か思い付いた様子）」

カードを比較する手元。

美子（モノログ）「…『サ』は、『東京サ行く』とか『庄内サ帰る』とか、移動や変化の方向を表すときに使われている！…でも方向じゃない『先生に手伝ってもらった』とか『犬に追い掛けられた』では『サ』は使わない！…そうか、これが三川町の文法か！」

美子、思い出す。

大学のゼミの場面が回想される。

美子（モノログ）「…そうだ！大学の授業で、先生が以前、『～<sup>なにになに</sup>の方に』『～<sup>なにになに</sup>の方へ』という古典語は、『さまに』や『さまへ』と言い、東北地方の『サ』は古くは、その言葉にまでさかのぼる…と話していた！『さまに』『さまへ』が変化して、『鶴岡サ』『東京サ』になった…」

考え続ける美子。

美子（モノローグ）「でも、今日、話を聞いたのは中学生だった。  
おじいさん、おばあさんはどうなんだろう？…」

携帯電話を取る美子。

#### 1-19 佐藤武夫家（夜）

外景。

#### 1-20 佐藤武夫家の居間

武夫氏夫婦、おじいさん、おばあさんが美子を温かく迎えてくれる。

美子 「（頭を下げ）皆さん、どうも。ちょっと分からないことがあったので…、教えていただいてもよろしいでしょうか？」

録音の許可を得る美子。

美子 「『東京サ行く』とか『庄内サ帰る』とか、こういう場合は『サ』を使いますよね」

武夫 「んだの一。三川ではよく『サ』を使うであの一〔よねえ〕。

『ここサある』とかの。『お前サけ一る』とか。て言うときも『サ』使うであの一。（美子が書き取っているのを見て）この『け一る』はの一。『あげる』という意味だなやの一」

ノートに書き取る手元。

美子 「あの…、中学生たちは、『良い天気サなった』とか『先生サなった』とかも『サ』を使うというふうに言ってたんですけども、武夫さんはどうですか？」

武夫 「おれかたの年代では、『サ』は使わね一。『いい天気サなった』とか『先生サなった』とかは使わねくて、『いい天気なった』とか『先生なった』て、『サ』は使わねであの一」

奥さん 「（おばあさんに） ばばちゃんだば、『いい天気サなった』て言うか？」

武夫氏の母 「『いい天気なったの』て言う」

武夫 「『先生サなった』ては言うかや？」

武夫氏の母『先生なったでけんの一〔って言ってたよ〕！』で言う

武夫 「方言も年代によってどんどん変わってきてんなやの一」

美子 「(うなずき) それでは、『犬に追い掛けられた』とか『先生に手伝ってもらった』と言うのはどうですか？『犬サ』『先生サ』というふうに言いますか？」

武夫 「その場合は『犬ガラ』で言うであの一。『犬ガラぽっかけらえて<sup>わ</sup>怖けて一の一〔って言うねえ〕」

奥さん 「『先生ガラ手伝ってもらったはげ助かった』で言うであの一」

---

方言調査が終わり、お孫さんも加わって武夫氏の家族と会話を楽しむ美子。

みんなの笑顔。

## 1-21 三川町の情景

町内を流れる赤川。

稲刈りが始まっている。

## 1-22 田田の宿のバス停留所

武夫氏と中学生たちに送られて来る美子。

バス停に着く。

裕太朗 「あの…(新聞紙でくるんだ枝豆を差し出し) これ、うちでとれた『だだちゃ豆』です。じいちゃんが持って行けって。どうぞ」

受け取る美子。

武夫 「美子さん。『だだちゃ』っていうのはの一、三川の方言では『おやじ』っていう意味だなやの一」

美子 「(裕太朗に) どうもありがとう！」

頭を下げる。

裕太朗 「いいえ」

武夫 「ありがとうではのー 『ありがとう』と言うのはね，三  
川の方言では，『モッケダノ〜』ていうなー」

美子 「(裕太朗と一緒に) みんな，いろいろと本当にモッケダ  
ノー！」

武夫 「あー，じょんだ [上手だ] ！」

美子の方言に，中学生たちも笑顔でうなづく。

バスがやって来る。

武夫 「(美子に，全国方言大会のパンフレットを渡し) 今度の  
『全国方言大会』には来いちゃの！みんな待ってるよ！」

美子 「はい。必ず来ます！」

バスが到着し，乗り込む美子。

美子 「(振り返り) じゃ，また。みんなも元気でね。武夫さん  
も」

後ろの座席へ向かう。

発車するバス。

手を振り合って別れを惜しむ。

遠ざかるバス。

風にそよぐ稲穂。

鳥海山も見送るかのように雄姿を見せている。

字幕《第2話「方言を考える」に続く》

## 第2話 方言を考える

美子が歩いて来る。

画面が止まり第2話タイトルが重なる。

## 2-1 大学の図書館 外から中へ

外景。

入って行く美子。

---

ロビーの一角で、端末を使って蔵書を検索する美子。

美子（モノログ）「山形県の三川町から戻った私は、すぐに、方言の参考図書や資料を調べました」

## 2-2 図書館内の書架

方言のコーナーに来る。

『現代日本語方言大辞典』と『日本方言大辞典』がある。

まず、『日本方言大辞典』を取り出し、ページをめくる。

美子（モノログ）「武夫さんが教えてくれた『もっけ』を調べてみよう。確か、『ありがとう』って意味だったな…」

見出し「もっけ【物怪】」とその欄。

字幕《もっけ》

美子（モノログ）『「もっけ。思いもかけないさま。意外なさま。かわいそうなさま」…か。ありがとうはないのかなあ…。『丁重であるさま。贈り物などを受けて礼に言う語…庄内』。あつ！これが、ありがとうだ！」

美子、今度は、『現代日本語方言大辞典』を引き出し、開いてみる。

美子（モノログ）「じゃあ、今度は『ありがとう』で調べてみよう」

見出し「ありがとう」、山形掲載ページの「モッケダ」。

美子（モノログ）「…あつ、出てる！」

そのページの「年配の男女が、物をもらった時などに感謝・恐縮の気持ちで用いる。」に下線が引かれる。

## 2-3 図書館内の閲覧室

美子、閲覧室のデスクで『日本方言大辞典』の「さ」のページを開き、  
ノートを用意する。

美子（モノローグ）「わたしは、『日本方言大辞典』で『さ』の用例  
を調べることにしました」

辞典の中の「さ」の項目。

黙読する美子の横顔。

「さ」の項目に重なる字幕。

字幕《さ 助詞 体言に付いて 対象 場所 方向などを示  
す》

美子（モノローグ）『「さ、助詞。体言に付いて、対象、場所、方向  
などを示す」…か」

更に字幕が重なる。

字幕《汽車さ乗る 青森県 机の上さおけ 岩手県》

美子（モノローグ）「青森県では『汽車さ乗る』、岩手県では『机の  
上さおけ』…か。東北地方全体で『さ』は使われているみたいだ  
けど、三川町の『さ』と同じなのかなあ…」

考える美子。

## 2-4 図書館内の談話資料のある書架

美子、書架に来て、談話資料をのぞき込む。

美子（モノローグ）「方言が聞ける資料もあるんだ！」

画面	ナレーション
国立国語研究所『方言談話資料』のディスプレイ。 字幕《国立国語研究所 「方言 談話資料」》	国立国語研究所の『方言談話資料』は、1974年から1976年にかけて収録した方言の会話とそれを文字化したものです。

<p>国立国語研究所『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』のディスクプレイ。</p> <p>字幕《国立国語研究所「全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成」》</p>	<p>国立国語研究所の『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』は1977年から1985年にかけて行われた文化庁による方言談話の収録事業「各地方言収集緊急調査」を原資料としたものです。</p>
--	--

## 2-5 図書館内の閲覧室

美子、ヘッドホンで「方言談話資料」の音声を聞き始める。

字幕《国立国語研究所「方言談話資料」より

宮城県<sup>わたり</sup>亶理郡<sup>わたり</sup>亶理町荒浜「学校の弁当」》

音声とともに画面に重なる字幕。「サ」の部分に下線。

### 方言談話の文字化字幕

方言	訳
<p>A ベントーナンテ ツート ドコガ デ オフルメアー シタ ドギ アレ カマボコナ (B ン) アエズ ツメデ モラッタラバ コレダワ カマボコ</p>	<p>弁当なんて いうと どこかで お 振舞いを した 時 蒲鉾をね。</p>
<p>B ミンナ<u>サ</u> ミシエデ アルグノ</p>	<p>みんなに 見せて 歩くの。</p>
<p>A ンー カマボコナンテナ ツメデ サ ベントー<u>サ</u> ソア テンカエッピンダオン ン ー マー フンバッテ</p>	<p>うん 蒲鉾だなんて言ってね つめ てさ、弁当に それは 天下一品だもん まあ ふ んばつして。</p>

<p>ホノー メス クードキ ホエズ  ネアグナンダド オカズ  ダエ クッタード ドナンダ  アー モド ベントー アッタ  ウエニ ンーナ ベントー エレ  ルンダ ハゴサ  ソステ アッタマル ヨニナッテ  ジェンプ アノ フグロ ホドエ  テ コー アッタメラレル</p>	<p>そして 飯 食う時に それが な  くなるんだぞ。おかずが。  誰が 食ったと どのなんだ。  （というのは）もと 弁当が あった  上に みんな （また）弁当を （重  ねて）入れるんだ 弁当箱を  そして 弁当が温まる ように  全部 弁当袋 ほどいて こう 温  められる。</p>
--	---

美子、聞きながら、

美子（モノローグ）「…ここでも『さ』が使われている…。（考えて）  
…『さ』が全国のどの地方でどんなふうに使われているのか、一  
目で分からないかなあ」

## 2-6 図書館内の言語地図のある書架

美子、言語地図のある書架の前にいる。

『日本言語地図』の棚。

美子（モノローグ）「方言が分かる地図があるんだ」

画面	ナレーション
<p>国立国語研究所『日本言語地図』のディスプレイ。  字幕《国立国語研究所「日本言語地図」》</p> <p>美子、書架から第6集を抜き出し、開いてみる。</p> <p>262 図「つらら」のページ</p>	<p>『日本言語地図』は 1957 年から 1964 年にかけて全国 2400 地点で調査した資料に基づきます。</p> <p>地図では各地の方言を記</p>



	号で表しています。内容は、この「つらら」のほか「恐ろしい」「かたつむり」といった単語が中心になっています。
--	---

凡例のアップ。「TAROGÉ」と「SUGA」に下線が引かれる。

美子（モノログ）「…ふーん。三川町では『つらら』を『タログ』って言うんだ。でも、その周りでは『スガ』って言うのか…」

地図から顔を上げ、

美子（モノログ）『さ』は、どんな分布になっているんだろう？それを調べる地図ってないのかなあ…」

美子、今度は『方言文法全国地図』の前に来て見る。

書架の『方言文法全国地図』。

画面	ナレーション
<p>国立国語研究所『方言文法全国地図』のディスプレイ。 字幕《国立国語研究所「方言文法全国地図」》</p> <p>美子、書籍を取り出し、ページをめくって見る。</p>	<p>『方言文法全国地図』は、1979年から1982年にかけて全国800地点で調査した資料に基づきます。</p> <p>『日本言語地図』と違って、こちらは、助詞や活用、また敬語といった文法が対象になっています。</p>

### 2-7 図書館内の閲覧室

美子、『方言文法全国地図』の第1集を持って来て、席に着き、地図を開く。

## 2-8 『方言文法全国地図』第1集の地図

画面	ナレーション
<p>『方言文法全国地図』第1集 19図「東の方<sup>へ</sup>」</p> <p>凡例のアップ。</p> <p>字幕 <sup>はんれい</sup>《凡例》</p> <p>凡例の「サ」のアップ。</p> <p>列島全図から東北地方にズームアップ。</p>	<p>方言地図では、分布をとらえやすくするために、方言の形を記号に置き換えて地図上に示します。</p> <p>この『方言文法全国地図』では、右側に方言の形と記号の関係を示した一覧があり、この部分は「凡例」と呼ばれています。</p> <p>「サ」は赤い三角形で表されています。</p> <p>そして、地図で見ると「サ」は東北地方に広く分布している様子が分かります。</p>
<p>『方言文法全国地図』20図 「東京<sup>に</sup>着いた」</p> <p>字幕《東京<sup>に</sup>着いた》</p> <p>東北地方にズームアップ。</p>	<p>「東京<sup>に</sup>着いた」の「に」でも、東北地方の「サ」の分布はよく似ています。</p>
<p>『方言文法全国地図』24図 「ここ<sup>に</sup>ある」の東北地方。</p> <p>字幕《ここ<sup>に</sup>ある》</p>	<p>「ここ<sup>に</sup>ある」の場合は、「サ」の分布は狭くなり、山形県を中心とした分布が見られます。</p>
<p>『方言文法全国地図』21図 「見<sup>に</sup>行<sup>った</sup>」の東北地方。</p>	<p>「見<sup>に</sup>行<sup>った</sup>」では、「サ」は東北地方でも太平洋側を</p>

字幕《見に行った》

東北地方から庄内地方にズームアップ。

『方言文法全国地図』23 図  
「大工になった」の列島全体。

字幕《大工になった》

東北地方にアップ。

更に日本海側にズームアップ。

凡例の<sup>ちよう</sup>蝶形記号をアップ。

『方言文法全国地図』27 図  
「犬に追いかけられた」の列島全体。

字幕《犬に追いかけられた》

山形県をズームアップ。

凡例の< g a r a >が現れる。

中心に分布していることが分かります。

ただし、三川町がある日本海側の庄内地方にも分布はまとまっています。

「大工になった」では、「サ」の分布はまばらになります。

替わりに<sup>ちよう</sup>蝶の形の記号がまとまって見られます。庄内地方もこれに含まれます。

この蝶の形の記号は、助詞が使われないこと、つまり「大工なった」であることを示しています。

「犬に追いかけられた」では、山形県に、<sup>だいだい</sup>橙色の記号が見られます。

この橙色の記号は、「ガラ」です。

これは山形県では「犬ガラ追いかけられた」という言い方が広く分布していることを示しているわけです。

## 2-9 図書館内の閲覧室

方言地図を見ていた美子…考える。

美子（モノローグ）「…なるほど…、『さ』がどんなふう、どこで使われているのかよく分かるなあ。共通語の『に』に当たるところが、全部『さ』ではないんだ（うなづく）。」

19 図の「東の方へ行け」の地図にめくり戻し、北から南へ視線を走らせ、

美子（モノローグ）「あれ！『さ』の仲間は東北地方だけではないんだ！」

## 2-10 『方言文法全国地図』

画面	ナレーション
『方言文法全国地図』19 図 「東の方へ」 東北地方から九州地方に移動。	「サ」の仲間は九州地方にもあります。
凡例「< s a i > < s e e > < s a N > < s a n i >」が現れる。	九州地方では、「サイ」や「セー」「サン」「サニ」といった形で用いられています。
九州地方からズームバックして列島全体。	これら「サニ」や「サイ」といった形は、「～の方へ」を表す古典語の「さまに」や「さまへ」の形や用法を今に伝えるものと考えられています。
	美子（モノローグ）「赤い色で示された『サ』の仲間は、遠

	く離れた東北と九州に見られる。そして、両方とも『さま』が元になっている。どうしてこんなに遠く離れた北と南に、似た言い方があるんだろう…」
--	--

## 2-11 図書館内の閲覧室

夕日が差す窓外を眺める美子。

## 2-12 大学の教室内（数日後）

佐藤亮一教授のゼミが開かれている。

教授の話をほかの学生とともに美子が聞いている。

## 2-13 図書館

外景。

## 2-14 図書館内の閲覧室

美子、『日本言語地図』を抱えて来て、今日も閲覧を始める。

ページを開いて見入る。

## 2-15 『日本言語地図』の「つらら」

画面	ナレーション
『日本言語地図』262 図「つらら」が開かれる。	
小樽運河の倉庫のつらら。	今度は「つらら」を調べてみましょう。
字幕 <sup>つらら</sup> 《氷柱》	
地図にパンして地図の全体。	これは『日本言語地図』の

清少納言の絵画

字幕《『枕草子』(302段)

「…風などいたう吹きつれば、たるひいみじうしだり  
土佐光起筆 清少納言図》

言語地図「つらら」に戻り、  
日本全図から東北地方へズームアップ。

紺色の線が飛び込んでタル  
ヒ・タロヒ・タレヒ・タロッ  
ペの領域を紺色の線で囲む。  
字幕《タルヒ タロヒ タレ  
ヒ タロッペ》

九州地方へ移動。

紺色の線が飛び込んでタロ  
ンベの領域を囲む。  
字幕《タロンベ》

更に紺色の線が飛び込んで  
タルミ・タロミの領域を囲

「つらら」です。

現代語では「つらら」ですが、平安時代の古典語では「タルヒ」と呼ばれていました。

このことは『枕草子』で確認できます。

このタルヒの仲間は、タル  
ヒ・タロヒ・タレヒ・タロッ  
ペという形で東北地方に分布しています。

タルヒの仲間は、九州地方にも見られます。

まず、タロンベという形が長崎と天草に存在します。

また、類似のタルミ・タロミなどが長崎を中心に分布

<p>む。</p> <p>字幕《タルミ・タロミ》</p> <p>九州地方から日本全図にズームバック。</p> <p>タルヒ類の各領域を囲む紺色の線が点滅する。</p> <p>字幕《タルヒ類》</p>	<p>しています。</p> <p>このように古典に現れるタルヒは、現代の東北地方と九州地方に分かれて分布しているわけです。</p>
---	---

## 2-16 図書館内の閲覧室

地図を見ている美子、納得している。

美子（モノローグ）「東北と九州に分かれて分布しているということとは、『さ』の分布に共通するわけだ」

## 2-17 『日本言語地図』の「つらら」（続き）

画面	ナレーション
<p>東北地方から山形県内陸にズームアップ。</p> <p>水色の線が飛び込んでボンダラの領域を囲み、更にズームアップ。</p> <p>字幕《ボンダラ》</p> <p>九州地方全図から熊本県へズームアップ。水色の線が飛び込んでホダレ、ホダラの領</p>	<p>「つらら」を表すそのほかの形を見てみましょう。</p> <p>山形県の内陸にはボンダラがまとまって見られます。</p> <p>そのボンダラに似た形のホダレやホダラが熊本県に分布しています。これらは水</p>

域を囲む。

字幕《ホダレ ホダラ》

日本全図から能登半島へズームアップ。水色の線が飛び込んでボーダレの領域を囲み、更にズームアップ。

字幕《ボーダレ》

日本全図にズームバック。

ボーダレ類の各領域を囲んだ水色の線が点滅する。

字幕《ボーダレ類》

日本全図から新潟・富山の方へズームアップ。緑色の線が飛び込んでカネコーリ・カナコーリ・カネコロを囲む。

字幕《カネコーリ・カナコーリ・カネコロ》

新潟・富山から中国地方内陸にパン。緑色の線が飛び込んでカネコーリ・カナコーリの領域を囲む。

字幕《カネコーリ・カナコーリ》

色の蝶の形で示されています。

さらに、これらに類似したボーダレは、能登半島の先端にも見られます。

つまり、以上のボーダレ類も東北と九州、更には能登半島に分かれて分布しているわけです。

新潟から富山にかけては、カネコーリ・カナコーリ・カネコロが連続しています。緑色の記号です。

同じ形は、中国地方の内陸にも分布しています。



日本全図にズームバック。カネコーリ類の各領域を囲んだ緑色の線が点滅する。

字幕《カネコーリ類》

近畿地方をズームアップ。

字幕《ツララ》

赤色の記号が密集している。

近畿地方から日本全図にズームバック。

順に、タルヒ類の紺色の線が点滅、ボーダレ類の水色の線が点滅、カネコーリ類の緑色の線が点滅していく。

今度は、逆に内側から各領域の線が点滅していく。

以上のカネコーリ類は、北陸地方と中国地方に分かれて分布していることになります。

それではツララはどうでしょう。

地図では赤色の地域がそれに当たります。近畿を中心に分布していることが分かります。

つまり、平安の古典語を引き継ぐタルヒが最も外側に分布し…、  
その内側には、ボーダレ類が分布し…、  
更にその内側には、カネコーリ類が分布し…、  
最も内側には、ツララが分布していることになります。

全体を見渡すと、近畿地方を中心とした、ほぼ同心円状の分布を示していることが分かります。

京都に紺色の点。

紺色が円となって紺色の各領域に重なると、各領域が紺に色づく。同様に水色と緑色の領域も色づいていく。

日本全土に字幕が重なる。

字幕《しゅうけんぶんぷ周圏分布》

字幕《タルヒ→ボーダレ→カネコーリ→ツララ》

字幕《ほうげんしゅうけんろん方言周圏論》

これは、長い期間にわたって文化の中心地であった京都で生まれた新しい言葉が、生まれた順番に従って、全国に広がっていったこんせき痕跡を分布として残したものと考えられています。

このように文化の中心地の古い形を反映して、遠く離れた場所に似た形が見られる分布は「周圏分布」と呼ばれます。

「周圏分布」が見られれば、文化の中心地の歴史をたどることができます。

「つらら」であれば、タルヒ・ボーダレ・カネコーリ・ツララという発生の順序が推定できます。

以上のような考え方は、「方言周圏論」と呼ばれます。

## 2-18 図書館内の閲覧室

美子、『方言文法全国地図』の19図を改めて引き寄せ、見入る。

「東京の方へ行け」の全図。

美子(モノログ)「そうか、方向を表す『サ』が東北と九州に分かれて分布していたのは『圏分布』なんだ。中央で古い時代に使われていたものを今に反映するのがこの分布というわけだ」

美子, 地図のページをめくりながら, ふと, 目を止める。

美子(モノログ)「…あれ? この地図では緑色が東北と九州に分かれて分布している。圏分布だ!」

## 2-19 『方言文法全国地図』86 図「見ろ」

画面	ナレーション
『方言文法全国地図』86 図「見ろ」の全図。 字幕《見ろ》 ミレの領域が線で囲まれる。 字幕《見レ》  地図に下に順に字幕が重なる。 字幕 《上一段活用……見る ラ行五段活用…取る》  字幕の「る」の部分が点滅。  字幕が追加される。 字幕 《上一段活用……見る→ ラ行五段活用…取る→取れ》	確かに緑色のミレは東北地方と九州, それに中部地方にも分布していますが, 圏分布とは別の見方がされています。  「見る」は, ラ行五段活用の動詞に末尾の形が似ていて, 両方とも「ル」です。        動詞の数としては, ラ行五段活用の方が圧倒的に

<p>更に字幕が追加される。</p> <p>字幕</p> <p>《上一段活用……見る→??</p> <p>ラ行五段活用…取る→取れ》</p> <p>字幕の「??」が点滅。</p>	<p>多いために、上一段活用が ラ行五段活用に引き付け られてしまうのです。</p> <p>そうすると？</p>
---	--

## 2-20 図書館内の閲覧室

考える美子。

美子(モノローグ)「…えーっと。『る』が『れ』になるわけ  
だから…、あっ、『見レ』か！」

## 2-21 『方言文法全国地図』86 図「見ろ」(続き)

画面	ナレーション
<p>「見ろ」の全図</p> <p>字幕が追加される</p> <p>字幕</p> <p>《上一段活用……見る→見れ</p> <p>ラ行五段活用…取る→取れ》</p> <p>字幕が追加される</p> <p>字幕</p> <p>《ラ行五段化</p> <p>上一段活用……見る→見れ</p> <p>ラ行五段活用…取る→取れ》</p> <p>更に字幕が追加される。</p>	<p>そうですね。「ミレ」に なるわけです。</p> <p>このような現象は「ラ行 五段化」と呼ばれます。</p>

<p>字幕</p> <p>《ラ行五段化…類推 上一段活用……見る→見れ ラ行五段活用…取る→取れ》</p>	<p>そして、このような変化を起こす原理は「類推」といわれます。</p> <p>この「類推」による変化は、どこであっても起こる可能性がある自然な現象です。</p>
---	---

## 2-22 図書館内の閲覧室

地図を見渡す美子。

美子(モノローグ)「見た目だけで、分布の背景にある歴史の判断はできないわけか。それにしてもこの『見ろ』の分布は、東側が水色で西側が赤色できれいに東西に分かれているなあ…」

## 2-23 東西対立

画面	ナレーション
<p>『方言文法全国地図』86 図「見ろ」の全図に字幕が重なる。</p> <p>字幕《東西対立》</p>	<p>このように東と西に分かれる分布は、「東西対立」と呼ばれます。</p>
<p>『日本言語地図』53 図「いる」の全図に字幕が重なる。</p> <p>字幕《いる おる》</p>	<p>ほかにも、人が「いる」ことを東日本ではイルと言い、西日本ではオルと言うことが知られています。</p>
<p>「いる」と「おる」の境界に</p>	<p>これら「東西対立」の境界</p>

線が引かれる。

線は、お互いによく一致していて、新潟県の糸魚川と静岡の浜名湖を結ぶ線にほぼ当たります。

## 2-24 図書館内の書架

美子、言語地図を戻しながら考える。

美子(モノログ)「(なるほどと深くうなずいて)ふーん、方言の分布をよく見ると、一定の原理が読み取れるわけか…」

ふと、書架の『国立国語研究所 鶴岡方言の記述的研究』に目が止まる。

「あら?!」という表情で急いで、その本を手に取り、表紙をめくる。

## 2-25 図書館内の閲覧室

美子、足早に戻って来て席に着き、ページをめくる。

中表紙の「鶴岡方言における助詞『さ』の用法」のアップ。

読み進めながら、やや落胆の表情。

美子(モノログ)「…三川町で大発見だと思っていた『さ』の使われ方は、もう大体調べられている…」

それでも気を取り直し、その論文からノートにメモを取る。

## 2-26 美子の部屋(夜)

参考資料を脇に、更にノートに書き込みを続ける美子の後ろ姿。

書く手を休め、ノートを眺めながら考える。

美子(モノログ)「…『さ』の用法は、もう調べ尽くされたと思ったけど、まだよく分からないところがあるなあ…」

机の上のコーヒーをぐくりと飲む。

美子(モノログ)「この論文とは別の見方からとらえ直すことも

できそうだ。それから、三川町での『さ』の使われ方は、お年寄りと中学生で違いもあった。このことももっと知りたい…」  
パソコンにいろいろ打ち込んでいく美子。

## 2-27 三川町での調査風景

鳥海山にマルチ画面で美子の調査風景が重なっていく。  
裕太朗君の祖父母、裕太朗君、五十嵐氏、そして武夫氏に尋ねる美子。  
オーバーラップして、田田の宿の方言ライブラリーで調査の結果をまとめていく美子。

## 2-28 全国方言大会 会場

外景。  
字幕《全国方言大会》  
舞台では、方言で演じられる人形劇「坊ちゃん忍者幕末見聞録」が行われている。  
美子、武夫氏や仲良しになった中学生と一緒に、熱心に舞台を見ている。

---

舞台は「お国自慢と鍋料理」に変わっている。  
地元・三川町の「いも煮」が楽しく庄内弁で紹介されている。  
会場は笑いの渦。  
美子、出演者の一人を見て「あれ？」と思う。  
その出演者は、武夫氏の家への道を教えてくれた女性だ。  
回想で、女性の姿が重なる。

美子（モノローグ）「あっ！あの人だ！」  
舞台の上では、「いも煮」の紹介が庄内弁で続けられる。  
中学生の女子Bが美子に、  
女子B 「美子さん、何て言ってるか分かるようになった？」  
明るい表情でうなずく美子にゆっくりズームアップ。

## 2-29 エンディング（回想）

大学の佐藤教授のゼミで学生たちの前でレポートを発表する美子。

三川町の体験や思い出がオーバーラップにより、モンタージュされる。

バス停で「もったいのー」という場面の美子の明るい表情がストップする。

広々とした庄内平野の空撮のオーバーラップとともにクレジットタイトルが重なる。

〔終〕



## ＜話し合いのために＞

☆ふだんあなたは、家族や近所の友人と話すときに地域の言葉、つまり方言を使っていますか。使っているとすれば、それはどんな言葉でしょう。まずは、気付いた特徴や単語を挙げてみましょう。

☆方言を使わないと思った人は、自分自身のふだんの話し言葉と、ニュースを読むアナウンサーの言葉や書くときに使う言葉とを比べてみましょう。どこかに違いはありませんか。

☆旅行に出掛けた場所で聞いたり、話し掛けられたりした言葉が方言だと気付いたことはありますか。それは、どこでどんな言葉でしたか。

☆テレビやラジオでどんな方言を耳にしたことがありますか。

☆知り合いにあなたと違う地方の出身の人がいたら、あなたの言葉と比べてみてください。どんな違いがあるでしょうか。

☆あなたの身近な方言にある「きまり」を探してみましょう。  
ビデオに出てきた「サ」のように、こんな場合には使えるけれども、こんな場合には使えないというようなことはありませんか。

☆あなたは方言と共通語を使い分けますか。身近な人と話す言葉と改まった場面(例えば、大勢の前で話すときなど)で話す言葉を比べてみましょう。

☆あなたが使っている方言はいつでも同じですか。友達と話す場合と目上の人や違う世代の人たちと話す場合とではど

うでしょうか。

☆あなたの地域で違う世代の人たちの言葉に耳を傾けてみてください。あなたの言葉と違いはありませんか。あるとすれば、どんな違いでしょうか。

☆図書館で方言について書かれた本を探してみましょう。もし、それが全国的な資料であつたら、あなたの知っている言葉がどの地方で使われているのか、確認してみましょう。もし、それぞれの地域について書かれたものであつたら、あなた自身の言葉と比べてみましょう。

☆方言地図が見られるなら、そこにある分布はどんなことを意味しているのか、考えてみましょう。

### 〈参考文献〉

国立国語研究所 編(2003)『新「ことば」シリーズ 16「ことばの地域差—方言は今—」』国立印刷局

佐藤亮一 監修(2002)『方言の地図帳』小学館

徳川宗賢 編(1979)『日本の方言地図』中央新書

### 〈付記〉

本作品の制作に当たっては、山形県三川町の皆さんに御出演いただくとともに、様々な面で、大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

## ＜制作体制＞

### ビデオ作品制作委員会

(○は委員長)

加藤 昌男(財団法人NHK放送研修センター 日本語センター  
エグゼクティブ・アナウンサー)

佐藤 武夫(山形県三川町議会議員)

品田 雄吉(映画評論家 多摩美術大学名誉教授)

藤井 千恵子(東京都教職員研修センター 研究部 研究課長)

○大西 拓一郎

(国立国語研究所 研究開発部門第二領域 主任研究員)

金田 智子

(国立国語研究所 日本語教育部門第一領域 主任研究  
員)

佐々木 和彦(国立国語研究所 会計課長)

當眞 千賀子

(国立国語研究所 研究開発部門第二領域 研究員)

福永 由佳(国立国語研究所 日本語教育部門第一領域 研究員)

森本 祥子(国立国語研究所 情報資料部門第二領域 研究員)

### 製作会社 東京シネ・ビデオ株式会社

制 作 横川 元彦

プロデューサー 川尾 俊昭

脚 本 大西 竹二郎

監 督 富永 一

「ことばビデオ」シリーズ  
＜豊かな言語生活をめざして＞3 解説書  
方言の旅

---

平成 16 年 3 月

編集・発行 独立行政法人 国立国語研究所

〒115-8620

東京都北区西が丘3丁目9番14号

電話 (03) 3900-3111(代表)

FAX (03) 3906-3530(代表)

ホームページ <http://www.kokken.go.jp>

印刷者

プロダクション昇朋

〒174-0063

東京都板橋区前野町6丁目13番2号102号室

電話(03)5392-9022

